



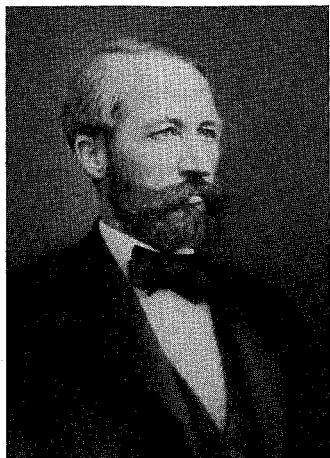
HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大百年史 通説. 口絵. 序. 凡例. 北大百年史 通説 総目次. 北大百年史 通説 細目次
Author(s)	有江, 幹男
Citation	北大百年史, 通説, 1-16
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30011
Type	other
File Information	tsusetu_mokuji.pdf



北大百年史

通
說



クラーク博士



初期のアメリカ人教師たち 左からカッター・ホイラー・ペンハロー夫人・ペンハロー・ホイラー夫人・ブルックス・ビーボディ



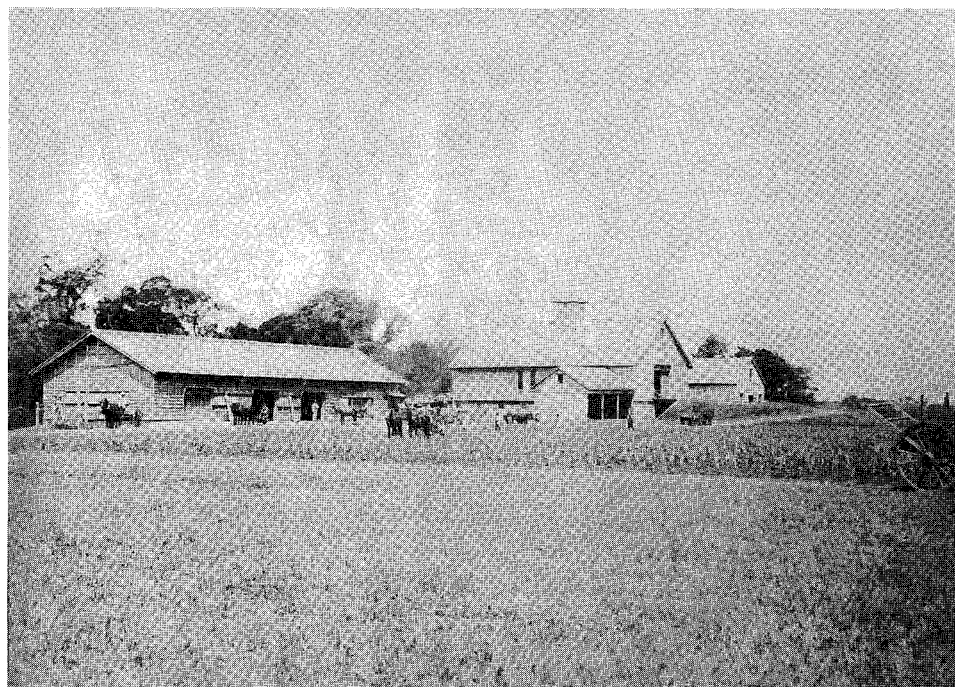
札幌農学校校舎 (1889年ごろ) 手前から観象台・北講堂・演武場・寄宿舍



卒業記念 (1891年) 前列は左から吉井・南・広井・佐藤・
橋口校長・宮部・新渡戸・杉・大島の教授陣



新渡戸稲造の描いた第1
回遊戯会の模様



モデル・バーン(中央)



東北帝国大学農科大学正門

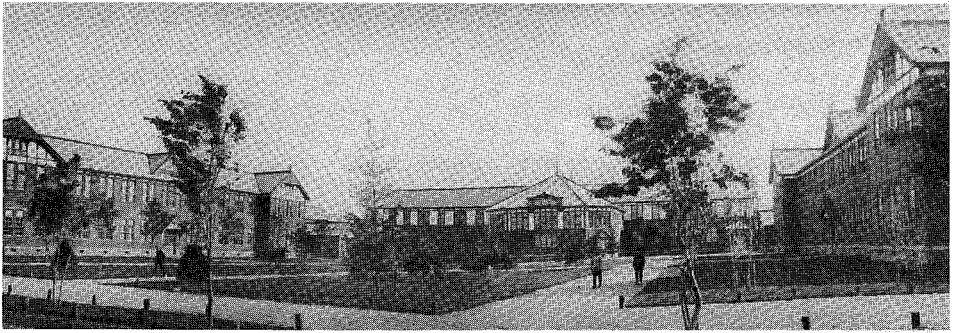


農学講堂裏の葡萄園と園芸専攻の学生たち

右から3人目星野勇三教授



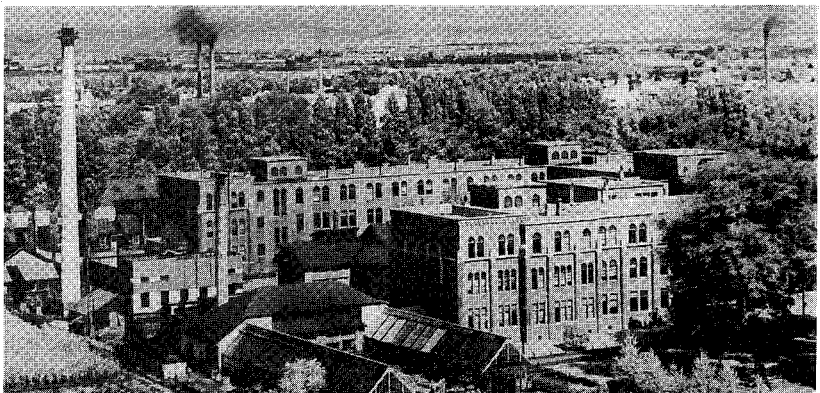
農科大学校庭(1917年)



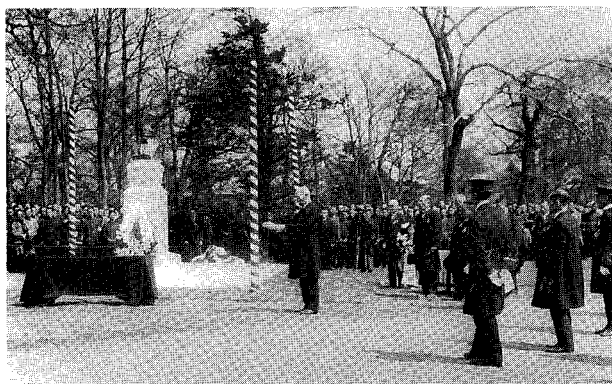
医学部創設当時の基礎医学講堂



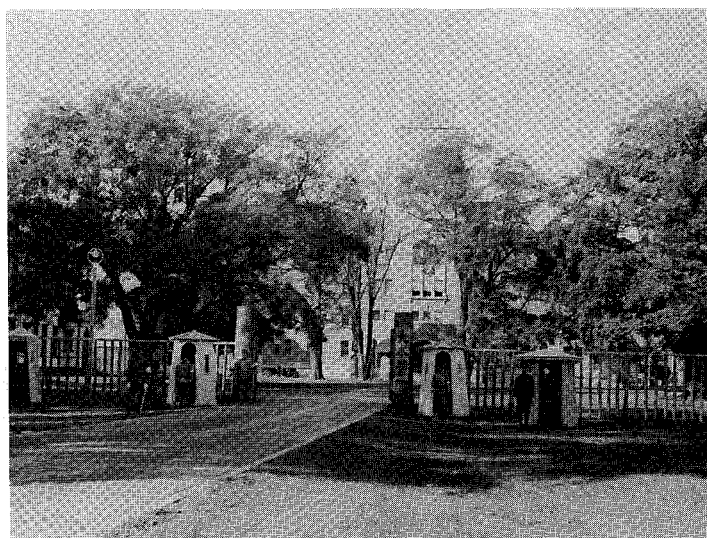
工学部開学式の学内公開に参集した札幌市民たち(1926年)



理学部本館



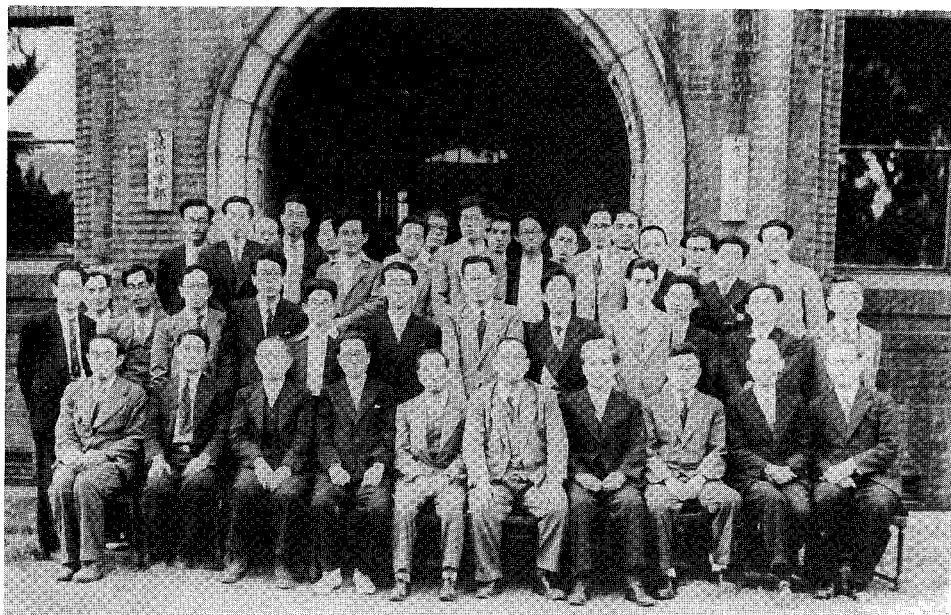
五十周年記念式典に際してのクラーク博士胸像除幕式(1926年)



大本営となった農学部本館(1936年)



専門部学徒の出陣(1945年)



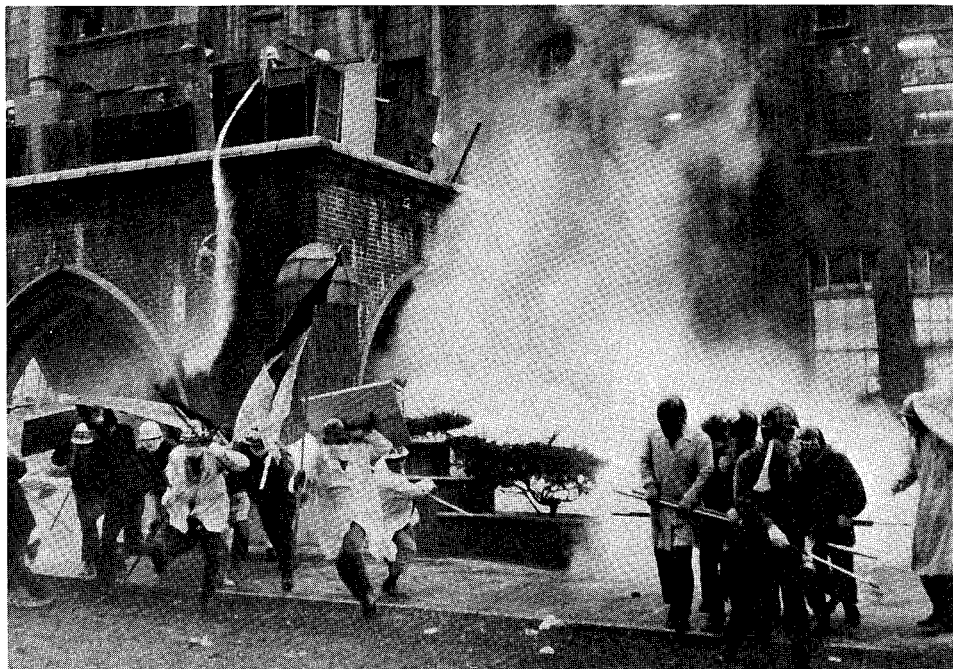
初期の人文系学部教官たち(1950年)



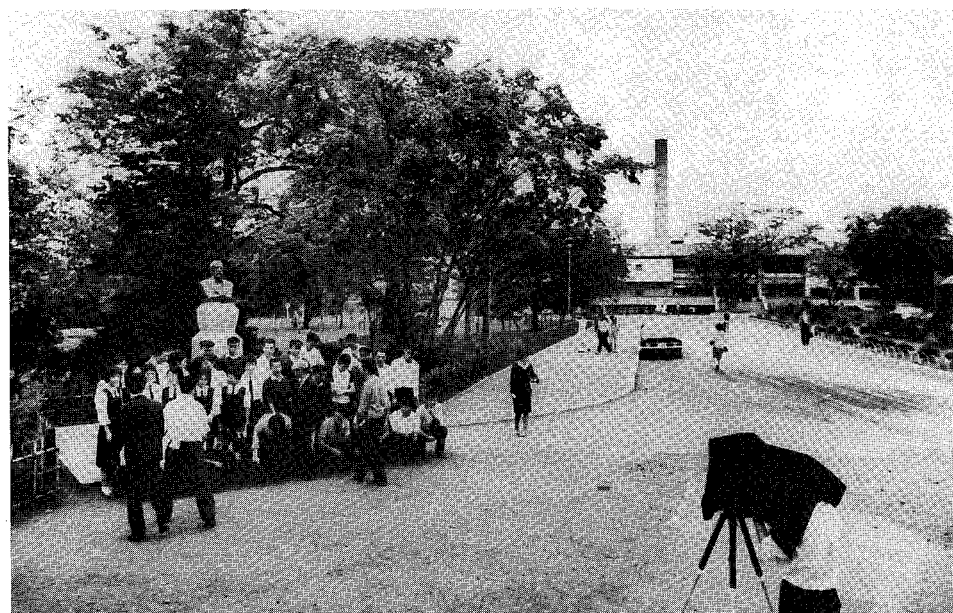
建築中の大学村10万円住宅(1950年)



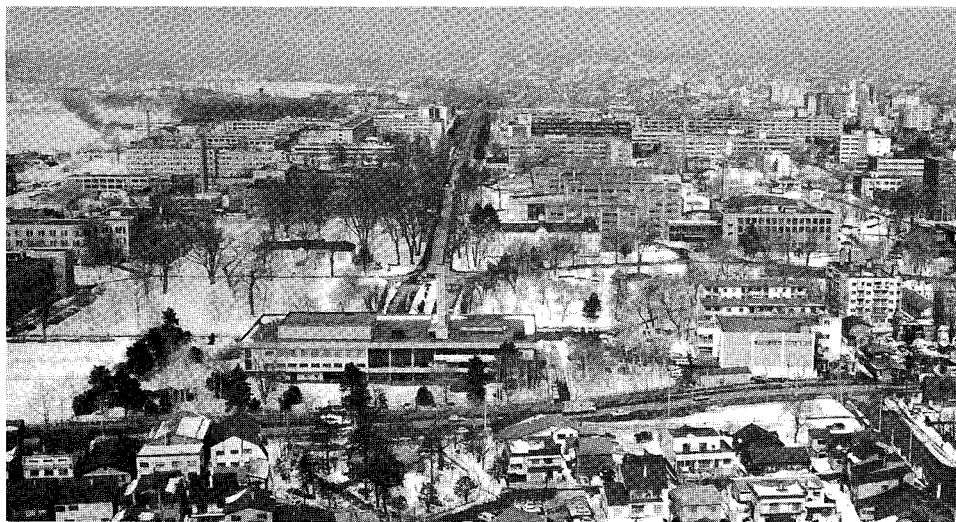
イールズ博士に抗議して演壇を占拠した学生たち(1950年)



大学紛争 理学部本館前(1969年)



クラーク像とクラーク会館



現在の札幌キャンパス (1982年)



創基百周年記念式典 (1976年)

序

明治時代の黎明期早々に札幌学校が開校され、一八七六年（明治九）八月に誕生した札幌農学校を源流とする私共の北海道大学は、一九七六年（昭和五一）九月、華やかに創基百周年を祝いました。これを機会に企画された記念行事は、記念式典の実施、記念館の建設、記念出版物の刊行という三事業の実施に大別されます。その後既に五年有半の歳月が流れた今日、大学の宿命として人去ってまた人來り、記念式典を中心とした講演会などのことは記憶の中でも遠くなりかかってきました。同窓生および教職員各位を軸とした学内外の淨財の大半が投入されて完成した百年記念会館は、構内でも特異な施設として静かにその機能を果しています。周辺の記念植樹の成長と共に百歳の記念すべき節目を伝承するよすがとなることでしょう。記念出版事業としては、既に写真集北大百年および北大百年史のうち部局史編一冊、史料編二冊の発行を了えており、このたび漸く計画最後の通説約一、五〇〇ページの刊行が実現する運びとなりました。永年に亘って編集の任に当られた関係者に対し深甚なる敬意と謝意を表する次第です。

北大百年史全四冊としての体系を見るとき、通説―部局史―史料の順序が将来に亘って肯定されることと思えます。いわば今回最後に編集刊行されることとなつたこの通説編こそ北大百年史の扉ともいふべき一巻であり、それだけに執筆・編集に当られた各位の周到にして綿密な配意がこめられた力作であることを疑いません。

自然科学の分野では、時間を変数として含む現象の総称として非常常という表現を冠しています。空間座標で表現できる現象に時間の要素が付加されるような非定常問題を解くことは一般に複雑となるか困難になってしまします。

歴史は絶え間なく刻まれる時間と共に作られる一次元的なものであることは事実ですが、これを織りなす社会現象の包含する要素があまりにも多岐にわたるため、平面的な描写を試みることは大変なことになります。まして歴史を描写する大事な要素である価値観自身が時代という大きな尺度で非定常性を含んでいるとしたらなおさらのことです。ことばをかえて見ると、有為な歴史を作り出すことは大変なことだということにもなります。私共の知っている時代を遡ること数十年、明治維新以来の変遷極まりなかつた時代を舞台に綴られた組織的有機体としての北海道大学の百年の歴史を、数巻にまとめ上げることに費された労力の大きさは偲ぶに余りあるものがあります。

北大百年史四冊は、文学部史学科の永井秀夫教授を室長とした百年史編集室の六年の歳月に亘る労力の結晶です。多くの方々の協力があったことは勿論ですが、この編集室に所属した延べ四名の専任者の中には、青山英幸、山田博司の両君が含まれており、史学専攻における大学院修士課程修了後の、貴重な時期を捧げられた熱意を特に記したいと思います。編集室において蒐集吟味された膨大な資料は、分類整理の上で散逸防止の策が講ぜられることになっています。

札幌農学校が明治時代の開化期における明確な存在であった故をもって、百年史編集の一時期永井教授を代表者とする「日本近代史における札幌農学校の研究」が文部省科学研究費の助成対象であったことも特筆されるべき事項です。札幌農学校時代の史料を垣間見るとき、明治時代を境とする西洋文明流入の源流に接することを実感しますし、北海道大学の創始期に先人が抱いていた壮大な気宇に触れる思いがいたします。

史書は単なる事実の記述に止ることなく、編者の裁量が適正なときにその価値を発揮するものと理解しています。膨大な資料の周辺に専門的考証を加えて集大成されたこの北大百年史シリーズは、現代における卒業生、教職員各位の中にその価値を見出されるにちがひありません。それだけでなく、これから永劫に亘って継承されるべき北海道大

学の歴史の中においても必ずその意義を更に高め、創基百周年を機として総予算の約四分の一を投じた出版事業の企画が、歴史的評価の中に光彩を添え続けるものと確信いたします。また、この北大百年史に見られるような変遷に富む発展的史実の累積は今後とも継続されなければなりません。私共の歩んでいる一日、一日が既に二世紀目の歴史を創作しつつあることに意を致し、光輝ある遺産の作製を期したいものと念願する次第です。

ここに通説の一卷刊行を以て有終の美を果す百周年記念事業完結の慶びを各位と頒ち、且つは北海道大学の洋々たる新しい歴史を展望して序文といたします。

一九八二年三月

北海道大学長 有 江 幹 男

凡例

一、本書は北大百年史通説として、北大の前身である札幌農学校の設立以前の事情から、北大創基百年目に当たる一九七六年（昭和五一）までの歴史を記述した。

一、記述を「通史」と「北大百年の諸問題」に分け、通史では北大百年の歴史を概観し、諸問題では北大に特徴的なこと、あるいは北海道と北大との関係などについて個別のテーマを掲げ記述した。

また、巻末に史料、統計、年表を掲載し、別に付録として構内図を添えた。

一、文章の体裁等は、左記の諸項によった。

- (1) 本文は当用漢字、現代かなづかいによることを原則としたが、固有名詞・学術用語等は当用漢字以外も使用した。
- (2) 紀年は西洋暦により、適宜日本の年号を（ ）に入れて補った。学年暦上の年度や会計年度も西洋暦で表示した。ただし一八七二年（明治五）までの日付は旧暦によった。
- (3) 本文中の氏名の敬称は省略した。
- (4) 固有名詞等読みにくいと思われるものには、ふりがなを付した。
- (5) 引用文等は、「」で囲み、あるいはやや小さな活字を用いて字下げを行い、本文と区別した。
- (6) 引用文中の漢字は新字体に改め、かなづかいは原文のままとした。
- (7) 引用文中明らかな誤りは訂正し、疑義がある個所には「ママ」と傍注した。
- (8) 書名、新聞名、雑誌名等は『』（欧文はイタリック体）で示し、論文名、パンフレット等は「」で示した。

北大百年史通説 総目次

序 北海道大学長 有江 幹 男

凡 例

通 史 1

北大百年の諸問題 487

史 料 977

後 記 1229

統 計 129

年 表 1

付 録 構内平面図（四枚）

題字 北海道大学前学長 今 村 成 和

北大百年史 通説 細目次

序 北海道大学長 有 江 幹 男

凡 例

通 史

第一章 開拓使の設置と仮学校（一八六九～一八七六） 3

第一節 開拓使の設置 4

開拓使の設置と開拓技術の導入 留学生の派遣

第二節 開拓使仮学校 7

仮学校の設置 生徒募集 仮学校の開校と仏学課の

設置 組織・教職員・生徒 仮学校の改正 再開

校 仏学課の廃止 地質測量生徒 電信生徒

アイヌ教育 札幌学校 女学校 生徒の生活と主

なできごと

第二章 札幌農学校の設置（一八七六～一八八六） 29

第一節 札幌農学校の創設

専門科の開設準備 専門教師の招聘 第一期入学生
開校式 札幌農学校諸規則 職制と草創期の教職員
施設の充実 校園の設置 予科 生徒募集と初期
の生徒たち

30

第二節 札幌農学校の教育と生活

カリキュラムの編成 授業と試験 農業実習 兵
学教育の開始 卒業式 教師陣の交替 外国人教
師の活動 課外活動 農学校とキリスト教 生徒
の日常生活

48

第三節 開拓使廃止後の札幌農学校

開拓使の廃止と農学校の移管 職制の変化と教職員
農商務省管轄下の農学校

69

第三章 札幌農学校の再編（一八八六—一九〇七）

第一節 組織の再編成

北海道庁の設置と金子の農学校批判 農園の縮小
札幌農学校ノ組織改正ノ意見 札幌農学校官制 組
織の再編 本科 予備科と予科 農芸伝習科

76

75

兵学科・兵学科別課

第二節 北海道庁管轄下の札幌農学校

官制の変化と教職員 農学校出身教師の進出 校務
運営機構の形成 農園の拡充と経営方針の転換 同
窓会農園 維持資金設置の動き 植物園の設置と博
物場 予科生徒 本科生

93

第三節 財政難と文部省への移管

農学校の財政難 特別会計法の適用に向かって 文
部省への移管 維持資金の形成 農場の拡大と小作
制の導入 農学校の財政 予科の廃止 校則の改
正 中学補習科設置問題

110

第四節 札幌農学校の拡張

学科の増設 予修科 土木工学科・森林科・水産学
科および農芸科 基本林・演習林 校舎の移転
創立二十五周年記念式典 教職員の増加と事務機構の
整備

126

第五節 教師と学生たちの活動

研究活動 学生たちによる諸団体 学生たちの生活
寄宿舎 新渡戸稲造と遠友夜学校 卒業生の就職状

142

況 留学生

付表一 札幌農学校の教官（一八八三～一九〇七）

付表二 札幌農学校の雇教員・嘱託講師（一八八七～一九〇七）

第四章 東北帝国大学農科大学（一九〇七～一九一八）

第一節 大学設置運動

帝国大学増設の動き 北海道大学設置運動の開始

運動の再燃 農科大学設置決定に至るまで 大学設置論

166

165

第二節 農科大学の組織と機構

農科大学の設置 農科大学の概要 農科大学の職員

総長・学長 評議会・教授会・協議会 事務組織

諸施設 農科大学の財政

179

第三節 学生たちの生活と活動

学生・生徒の出身地 卒業生の就職状況 学生たちの活動と生活

恵迪寮 札幌の自然と農科大学の一年

194

第五章 北海道帝国大学の創設（一九一八～一九三〇）

第一節 北海道帝国大学の設置

設立にいたる経緯 創設資金 北海道帝国大学の設置
医学部の設置 高等教育機関の拡張 工学部
設置の背景 工学部の設置準備 工学部の設置
創立五十周年記念式典 大学規則の改正 総合大学
化の構想 学位規程の制定

210 209

第二節 各部署の状況と大学の運営

各部署の充実 他大学の状況 教職員の増加 各
学部の学則 北海道帝国大学通則 学部規程の制定
予科 専門部など 理学部設置の計画 理学部の
開学 評議会の発足 教授会の運営と学部長の選挙
事務機構の変化

225

第三節 学生・生徒の状況と学生運動

学生数の増加 学生生徒の出身地 卒業生の就職状
況 学生と社会運動 大学の対応 文武会の活動
文武会事件

243

第六章 戦時期の北海道帝国大学（一九三〇～一九四五）

259

第一節 不況期の北海道帝国大学

「総長候補者選挙内規」の制定 佐藤総長の退任

南総長の就任 大学の将来計画 恐慌と緊縮政策

予科・専門部廃止問題 水産専門部の独立 土木専門部と実科の昇格運動 理学部の完成 農学部の変更

築 農場・演習林の整理問題 高岡総長の就任

日本學術振興会の出発 満州国および樺太との関係

研究施設の増加 恵迪寮の移転 左翼運動の弾圧

天皇の行幸

第二節 戦争下の北海道帝国大学

今総長の就任 大学自治の圧迫 勤労作業・軍事教練

練 興亜学生勤労報国隊 紀元二六〇〇年と報国会

アジア各地からの留学生 研究成果 戦時科学振興

と技術者養成 臨時附属医学専門部と臨時教員養成所

学科・施設・講座の増設 低温科学研究 超短波

研究所 触媒研究所 大学財政の拡張 在学年限

の短縮 教職員の召集 学徒出陣 勤労働員の強化

大学院特別研究生 農林専門部の設置 北方

結核研究所 敗戦

第七章 国立総合大学の発足（一九四五～一九四九）

第一節 敗戦と大学

授業再開 占領軍の校舎接収 伊藤総長 軍国主義的教育研究の排除 男女共学と入学試験制度の変化
学友会の結成 北海道大学 官制の改正 学生の炭鉱出勤 クラーク像の再建

298 297

第二節 法文学部の設置と既設部局の変化

法文学部設置の経緯 法文学部の開設 創設の苦難
理系学部 各専門部・厚生女学部 教職員数 学
生生徒 留学生 戦後の大学院特別研究生 副手
教官層の変化 教職員の住宅事情 農場の解放

307

第三節 民主化の動きと管理運営

職員組合 助手会 協同組合 学生自治会
「学生の政治的活動について」 教授会 学部運営
委員会 部長選挙 北海道大学全学協議会 事
務局 輔導委員会 戦後の特別会計 特別会計か
ら一般会計へ

325

第八章 新制北海道大学への改組（一九四九—一九五六）

第一節 改組とその進展

340 339

教育制度の改革 『大学制度改革案』 実行委員会

から対策委員会へ 設置認可申請書 新制北大の設

置 教養学科 一般教養科 「新制大学のあり方」

一般教養部 通則 包括学校の廃止 看護学校・

助産婦学校 教育学部 水産学部 文系学部

結核研究所 獣医学部 理系学部 新制第一回卒

業式 旧制大学院 大学院設置準備委員会 大学

院の設置 学位——旧制・新制 講座の法制化

学科目 スラブ研究室

第二節 教育・研究の体制と環境

367

入学試験 教養課程 学部移行・進学 専門課程

戦後の研究活動 教官 「講座別」・「学科別」

事務官・技官等 学生数 大学院学生数 留学生

学寮 学寮規則の制定 学生生活調査報告 建物

第三節 運営体制の模索

387

大学法案 北海道大学協議会 学長選考基準 高

瀬文相事件 イールズ事件 学生生徒団体に關する

内規 学長辞職 事務局・学生部 学生部委員会

評議会 大学院委員会

学長改選
新制大学の財政

第九章 拡張期の北海道大学（一九五六～一九六九）

第一節 北海道大学の拡張

八十周年記念式典 大学設置基準 教養部と類・課

理工系増員計画と学生急
科学技術教育の振興
程

増対策 学部・学科の増設 大学院の増設 研究

所の拡充 薬学部の発足 歯学部の設置 九十周

年記念式典
古市学長
堀内学長

第二節 各部局の状況と建物の改築

理・工学部 医学部と学内共同利用施設 農水産系

学部
文系学部
工業教員養成所
附属学校

農場・演習林
クラーク会館
図書館の新築と充実

教養部の新築
文系部局校舎
理系部局の改築

第三節 教職員・学生と管理運営

学生数・院生数 教官数 教官層 職員の増加

学生生活調査 『大学院白書』 国際交流 学生

運動など	学寮規則	各部署の運営	教養部の官
制化問題	教養部審議会	部署長選考規程	事務
機構			

第十章 最近の北海道大学（一九六九—一九七六）……………455

第一節 大学紛争とその後の北大……………456

大学紛争	学部改革	学寮問題	学長選考基準の改正
	丹羽学長の就任	構内環境の整備	

第二節 独立研究科の設置と大学改革の検討……………464

環境科学研究所の構想	設立の経過	独立専攻の設置
改革調査専門委員会	改革検討委員会	『改革検討報告（教養課程に関すること）』
二つの特別委員会委員の成立	改革検討委員会の解散	今村学長の就任
『教養課程の改革について』	その後の教養改革	

第三節 部局の状況と創基百周年……………475

各部署の変化	法学部の改革	大学院	学生数
留学生	各種センター	事務局	百周年記念事業の計画
創基百周年記念式典	記念行事と記念事業	百年の回顧	

北大百年の諸問題		487
札幌農学校と米欧文化		489
札幌農学校と英学		506
農芸伝習科と農芸科		519
農藝園		536
札幌農学校とキリスト教		550
開識社の研究		565
植民学の成立		580
校友会誌からみた札幌農学校の校風論		603
札幌農学校と明治社会主義		622
札幌農学校の建築		642
予科教育の特色		671
北海道農業と北大		685
田中 彰		
佐伯 有清		
大崎 恵治		
高嶋 正彦		
大山 綱夫		
亀井 秀雄		
田中 愼一		
秋月 俊幸		
松沢 弘陽		
越野 武		
水野 一		
石塚 喜明		

北海道農政と北大	崎浦 誠治	699
北海道の小作問題と北大	湯沢 誠	714
附属農場	大庭 幸生	729
北大における満蒙研究	長岡 新吉	746
大正期の北海道帝国大学とキリスト教	松沢 弘陽	762
北海道の稲作と北大	高橋萬右衛門	777
北海道林業と北大	小関 隆祺	789
演習林	小鹿 勝利	801
北海道の水産業と北大	田村 正	816
北海道の鉱業と北大	木下 重教	832
北海道の土木事業と工学	尾崎 晃	850
北大農学部動物学と北海道	朝比奈英三	865
北大農学部の植物学と北海道	宇井 格生	881

北大における地質学と北海道	湊 正雄	893
北大における雪氷学	黒岩 大助	908
北海道の医療と北大医学部	有末 四郎	921
北海道のエキノコックス症と北大	山下 次郎	936
北大医学部解剖学教室におけるアイヌの形質人類学的研究	伊藤 昌一	948
北方文化研究室顛末	高倉新一郎	962
史料		977
官制		985
規程		1004
式辞等		1071
戦後改革と大学紛争		1142
歴代の学長および部局長等		1210

後記	統計	年表
.....		
1229	129	1

付録 構内平面図(四枚)